

社会人のスポーツに関する意識調査の分析

青山 昌二* 平田 久雄* 木村 國次**

* 東京大学教養学部体育科

** 共立女子大学

Analysis of The Workers' Sports Awareness

Shoji Aoyama*, Hisao Hirata* and Kunitsugu Kimura**

* Department of Sports, College of Arts and Science, The University of Tokyo

** Kyoritsu Women's University

Abstract

The purpose of this study was to examine the workers' sports awareness. Research was carried out in Tono city in Iwate prefecture by questionnaire. The data collected were analysed mainly from the comparison of those who presently play sports and those who don't. The results were summarized as follows:

1. There was little relation between what kinds of sports the persons questioned played frequently in their schooldays and what kinds of sports they played presently.
2. In contrasting the kinds of sports the workers in Tono expressed desire to play, with that of those in Tokyo, there was a great difference found.
3. As for the establishment of sports facilities, public parks and green belts in which the natural environment abounds were mostly requested.
4. Those who presently play sports, expressed a desire for more convenient sports facilities and for lower charges for using them (including parking fees).

1. 研究目的・方法

近年、全国処々の市区町村等の地方自治体において、社会人の健康や体力の維持・増進に資する目的から、運動やスポーツ活動の実態ないしは意識を調査することが盛んに行われ、「スポーツに関する〇〇区民意識調査」といったタイトルの報告書が多く出されている。本研究も、これと同様な視点から岩手県遠野市の市民を対象として行った調査研究「遠野市民の運動・スポーツに関する意識調査」の結果について、運動やスポーツを行っている者で行っていない者との対比という点に焦点をあてて分析を試みたものである。

遠野市を対象とした調査研究の意図は、如上の市民の健康や体力の維持・増進に資するにあること、さらには、市のスポーツの指導や施設の調査をも加えた総合的な研究から、年々人口減の傾向にある同市（現在人口約3万2千人）の活性化の一助ともなる要因を見出し得るか否かを探ること、ひいてはこうした模索が一般的な、いわゆる法則性を持ち得るものであるか否かをおさえること、にある。

この調査は、第一次調査として、質問紙法により、昭和62年10月に実施したものである。

分析の対象、すなわち標本構成は、調査票の「現在所属しているスポーツクラブ・教室等」の設問で「入っている」・「入っていない」の選択肢によったが、「入っている」にはこれに加えて、別に調査したスポーツ教室参加者をも含めた。分析にさいしては、「入っている」者を「所属群」、「入っていない」者を「非所属群」と略記した。

対象

男性 所属群 145, 非所属群 337名
女性 所属群 143, 非所属群 405名

2. 結果

(1) 基本的属性

所属群について、回答者の年齢は、男女をこみにして20・30歳代が約60%、40～60歳代が約40%とその分布幅は大きい。また、この年齢分布は、標本全体のなかでは幾分20・30歳代への寄りがみられる。既婚・未婚別にみると、男性は60：40%、女性は80：20%である。

学歴は、初等・中等・高等教育の3段階に分けると、この順で、男性の所属群20：55：25%、非所属

群30：50：20%であり、女性の所属群17：57：26%、非所属群28：54：22%である。すなわち、男女とも所属群の方が非所属群に比して幾分高等教育の方へ寄り気味である。

(2) 健康や体力について

図1は、現在の健康状態についての回答結果を示したものである。これをみると、「健康である」と

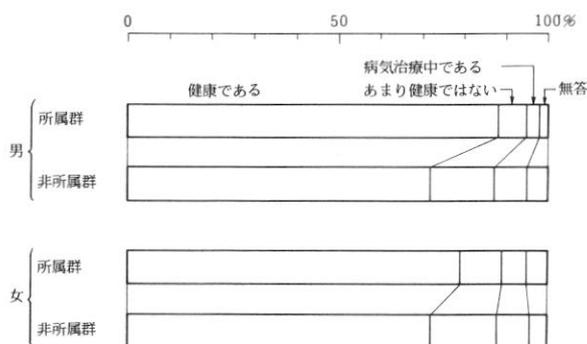


図1 現在の健康状態 (%)

回答した者の割合は、所属群・非所属群の順に、男性88：72%、女性79：72%と、男女とも、所属群の方が非所属群に比して高い(ともに1%水準で有意)。この結果を東京都東村山市で実施した同様な調査結果(男性86%、女性89%)と比較すると、女性の本調査値すなわち遠野値は東村山値に比して低い¹⁾(1%水準で有意)。

自分の体力の自己評価について、「同年齢の人より体力の衰え方が少ない」「衰えは感ずるが年齢相応で仕方がない」および「同年齢の人より衰え方が激し過ぎる」の3選択肢を設けて質問してみると、

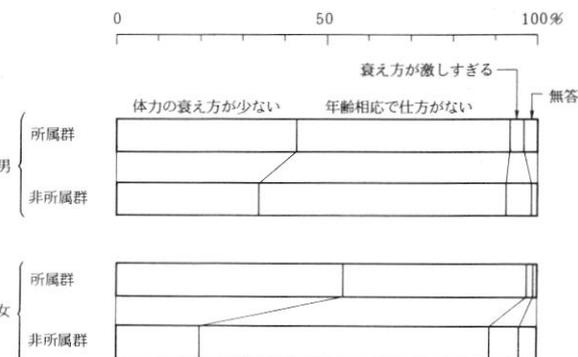


図2 体力の衰退感 (%)

図2に示すように、男女とも、「体力の衰え方が少ない」と回答した者の割合は所属群の方が非所属群に比して多い。特に女性では、所属群54%、非所属群20%と、34%もの大きな開きが見られる（男性5%水準、女性1%水準でともにその差は有意）。

「衰え方が激し過ぎる」は、所属群から非所属群へ、全体的にみれば少ないとはいえ、男性では3%から6%へ、女性では1%から7%へと多くなっている。つまり、所属群の方がそれだけ非所属群に比べて、自分の体力を高め評価するあるいは強気に評価する傾向がうかがわれる。

次に、運動やスポーツが得意かどうかの自己評価についてみると（図3）、「大いに得意」+「どちらかといえば得意」対「あまり得意ではない」+「苦手である」として、男性の所属群72:27%、非所属群53:46%、女性の所属群60:38%、非所属群37:61%であり、男女とも、所属群の方にスポーツを得意とする側への回答が多く、反対に得意でないとする側への回答は非所属群に多く（ともに1%水

とる」の項目では、多少の高低はみられるものの、所属群と非所属群とははっきりした回答傾向の相違はみられない。

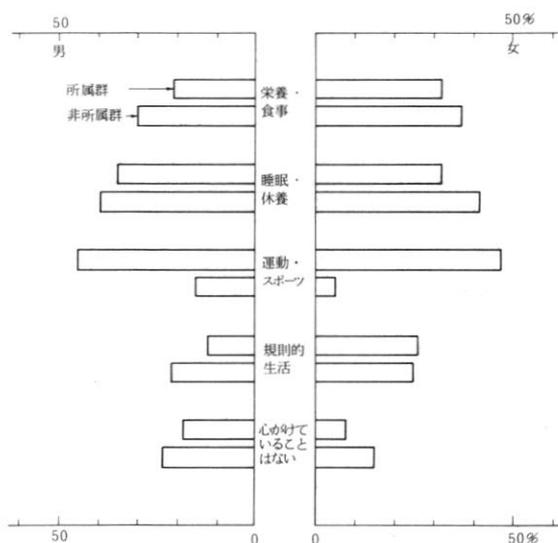


図4 健康対策 (%) (複数回答)

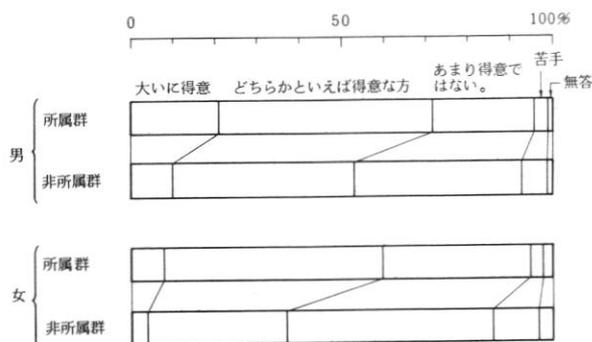


図3 スポーツの得意不得意 (%)

準で有意)、これが男性では約5割、女性では約6割にも達している。やはり、スポーツクラブやスポーツ教室に参加する・しないには、その人のスポーツに苦手意識をもっているか・いないかにかなり関わってくるということが看取される。

次に、日頃自分の健康や体力の維持増進のために心がけていることがあるかどうかについて、選択肢を設けて質問してみると、図4に示すように、所属群は「運動やスポーツをする」が男女を通じて47~45%と、非所属群に比べて断然多い。そのほかの、「栄養・食事に気をつける」や「睡眠・休養をよく

次に、図5によって、ふだん自分が運動不足の状態にあると思うかどうかという、いわゆる運動不足感についてみると、「いつもそう思う」者は男女とも所属群より非所属群の方に多く（ともに1%で有意差あり）、しかし「いつもそう思う」+「たまにそう思う」は男性では両群とも同じく75%であり、女性では所属群79%、非所属群89%である。

この結果は、昭和58年東京都大田区調査²⁾の70%（男女こみ。設問形式は遠野市調査と同一ではない）



図5 運動不足感 (%)

と比較して、運動不足感をもつ者の割合が多い。特に女性非所属群の約90%はきわめて高い。なお、大田区調査の「よく運動しているので思わない」10%（男女こみ）と比較すると、本調査の所属群は男性19%、女性16%と、ともに上回っている。

(3) 実施スポーツ

図6は、この1年間に行った運動やスポーツについての回答である。これをみてまず目につくことは、種目による多い少ないは別として、いずれの種目も男女とも、所属群の方が非所属群に比してこの1年間に行っている割合が高い。所属群と非所属群との間に開きのある種目をあげると、軽い球技（女性）、ダンス（女性）、ランニング（男性）、ソフトボール（男性）、バスケットボール（男女）、サッカー（男女）、卓球（女性）、バドミントン（男女）、水泳（男女）、スキー・スケート（男女）である。この開きには、たとえばクラブの「走友会」の反映

がランニングにみられるように、クラブやスポーツ教室での種目の反映が強いとみられよう。

この非所属群の結果と昭和61年大田区調査³⁾の結果（男女こみ）と比較してみると、大づかみに言って、ボウリング（大田区18%）、水泳（大田区20%）、ゴルフ（大田区13%）、テニス（大田区12%）以外の種目ではほとんど非所属群の方が大田区よりも高い。ここには、都会と遠野市という農村的小都市との対比がそのまま表われ、それだけ遠野市の方がスポーツをやる機会が多いとみられようが、とはいえ、卓球やテニスやバドミントンが非所属群にきわめて少ないということは指摘しておくべきであろう。特に、テニスは男女こみで5%程度と、低い。また、スキー・スケートの女性非所属群の7%は大田区の12%を下回る値であり、意外に少ない。

次に、図7によって、学校時代に「一番好きで一番よくやった運動やスポーツ」についてみると、男性では野球、サッカー、女性ではバレーボールである。所属群と非所属群とを比較すると、男子の野球はともに20%弱で同じであるが、サッカーは23:11%、女子のバレーボールは30:16%と、やはり非所属群は低い。

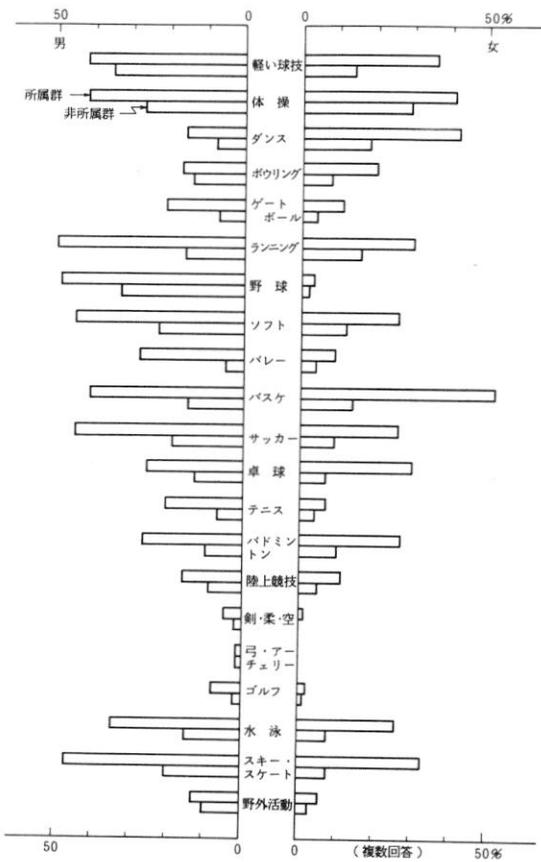


図6 この一年間に行ったスポーツ (%)

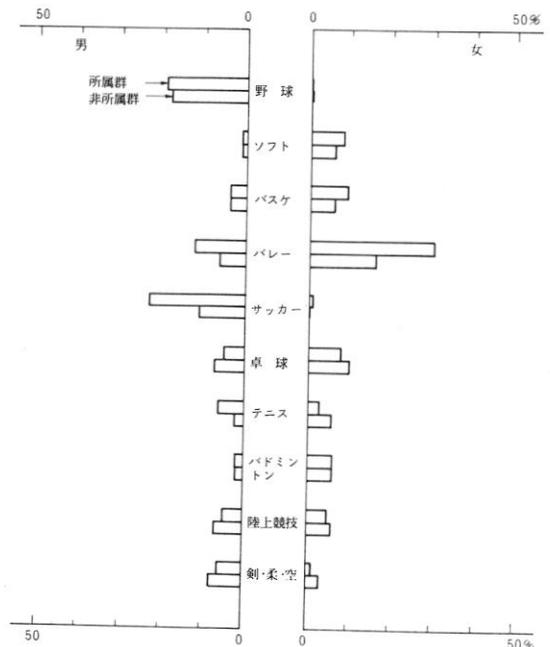


図7 学校時代によくやったスポーツ (%)

さらに、図8によって、学校時代に一番よくやった種目について現在どの程度やっているかをみると、「よくやる」と回答した者は所属群に多く、男性28%、女性20%である。非所属群では、男性8%、女性はわずか2%にすぎない。これと裏返しであるが、「ほとんど(または全く)やらない」をみると、所属群では男性27%、女性37%であるのに比して、非所属群では男性53%、女性71%を占めている。すなわち、現在クラブに所属していない、またスポーツ

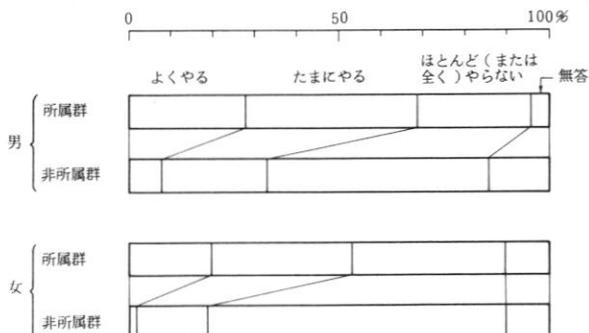


図8 学校時代に一番好きでよくやったスポーツについての現在の実施程度

教室等にも参加しないという人たちにあっては、男性の半数、女性の7割の者が、学校時代に好きで一番よくやったスポーツと無縁になってしまっているわけである。

図9は、こんどは、現在一番よくやっているスポーツである。これをみると、男性の所属群ではサッカー17%、野球15%、ランニング11%、バレーボール9%の順となり、女性の所属群ではバレーボール30%、体操16%、サッカー12%、軽い球技9%の順となる。女性のサッカー12%には市としての特色がうかがえよう。

学校時代に一番よくやったスポーツ、この1年間にやったスポーツ、現在一番よくやっているスポーツと、この3問を通じてみると、野球にはある程度の連続性がみられること、しかしバレーボールにおいては女性非所属群に、卓球・テニス・バドミントンにおいては男女とも著しい低滞がみられること、水泳にいたっては学校時代も現在もきわめて低い(2%以下)こと、等が指摘される。

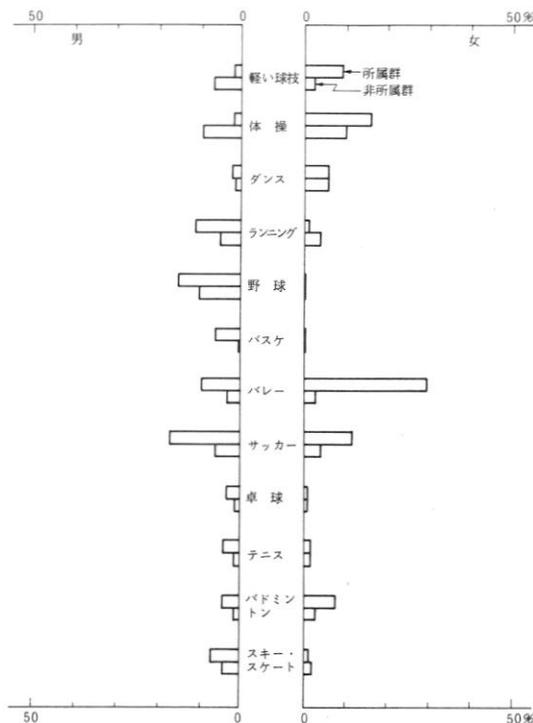


図9 現在一番よくやっているスポーツ (%)

(4) 運動やスポーツの実施程度

運動やスポーツの実施程度について、「週3日以上」+「週1~2日」をみると、男性では所属49%、非所属群21%、女性では所属群47%、非所属群14%と、所属群から非所属群への傾斜は大きい。「それ以下」(月1~3日より少ない)と回答した者も、所属群非所属群および男女を通じて30~20%みられる。

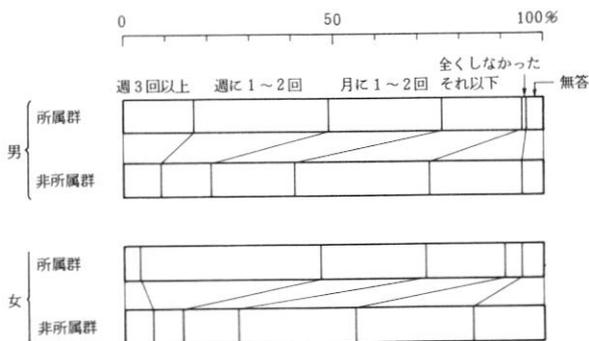


図10 運動やスポーツの実施程度 (%)

この結果を、昭和62年文部省実施の「壮年体力テスト」の結果⁴⁾と比較してみると、「週3日以上」+「週1~2日」の文部省値がほぼ男性44%、女性41%となるので、所属群はこれをわずかながらも数的に上回るが、非所属群にあってはこれを大きく下回っている。

質問形式は違うが、東京都中央区で昭和62年に実施した「区政世論調査」のなかの「運動をする頻度」⁵⁾をみると、「よくしている」+「ときどきしている」対「ほとんどしていない」+「していない」では、男性は45:55%、女性は26:74%である。遠野調査の、週3日以上から月1~3回までを括ると、男性では所属群76%、非所属群41%、女性では所属群72%、非所属群27%となり、男女とも、中央区の調査を所属群は上回り、非所属群は相近い値となる。とはいえ、女性にみる月1~3回の運動実施までを含めても27%というのでは、資料比較はともあれ、低いと言わざるを得まい。

(5) 運動やスポーツをする理由等

運動やスポーツをするいちばんの理由について、選択肢を設けて質問してみた。図11がこの結果である。まず、「それをするのが楽しいから」の回答

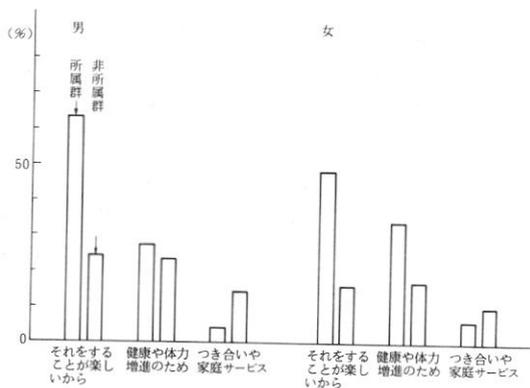


図11 スポーツをする理由(%)

に男女とも所属群と非所属群とで大きな開きがみられる。男性では所属群63%、非所属群24%、女性ではこの順で48%、16%である。「健康や体力増進のため」は、男性では両群を通じて27~24%、女性では所属群34%、非所属群17%と、所属群の方が高い。「つき合いや家庭サービス」は、男女とも低いが、男性では所属群4%、非所属群14%、女性ではこの

順で6%、10%と、ここではともに非所属群の方が上回っている。大田区の掲掲「意識調査」のこの質問をみると⁶⁾「好きだから(趣味)」が男性47%、女性30%、「健康・体力づくり」が男性36%、女性56%、「親睦・つき合い・家族との交流」が男性12%、女性9%である。遠野調査では非所属群の男性36%、女性53%もの者が無回答であることから、大田区調査との比較は適切ではないが、「健康・体力」の項で大田区調査に比して遠野調査は低い。

次に、スポーツをもっとやれるようになるための条件について、選択肢を設けてたずねてみたものが図12である。「もっとひまができればよい」が男性で約30%、女性で26~21%、次いで、所属群の方が非所属群より積極的に「施設や場所または参加できる催し物」、「一緒にする仲間」があげられる。したがって、よく言われるように、ここでも、ひま・場所・仲間にとめられる。

それでは一番望んでいるスポーツ施設は何か。複



図12 スポーツをもっとやれる条件(%)

表1 望まれるスポーツ施設(%)

施設	男		女	
	所属群 (145) %	非所属群 (337) %	所属群 (143) %	非所属群 (405) %
1 体育館	21	7	25	9
2 テニスコート	8	5	13	9
3 野球場	17	16	1	2
4 屋内プール	6	5	8	6
5 屋外プール	2	2	-	2
6 運動広場・グラウンド	26	20	14	14
7 ゲートボール場	6	4	1	3
8 柔道場	1	1	-	-
9 剣道場	1	1	1	-
10 弓・アーチェリー場	4	3	-	2
11 サイクリング場	1	6	7	5
12 キャンプ場	4	6	10	5
13 屋外のバレーやバスケットコート	2	2	4	4
14 自然環境の豊かな公園・緑地	23	37	30	40
15 その他	9	5	1	5
16 特になし	6	21	13	22
17 無答	3	4	6	8

複数回答(2つ以内)

複数回答(2つ以内)の結果を表1にあげる。これを見ると、望まれる施設として、体育館が所属群に断然多いこと、運動広場・グラウンドが所属群非所属群とも多いこと、そして自然環境の豊かな公園・緑地が最も多いこと、ここでは非所属群の方が一層多いこと、等が目につく主な点である。

なお、所属群のうちのスポーツ教室参加者に自由記述式で「市民のスポーツがより活発になるために最も望まれることは何か」を質問したところ、記述のあった中では、ほとんどの者が「施設の充実」をあげている。中でも、「気軽に使える施設」にウェイトがおかれており、市民センター施設の無料開放、夜間照明設備の充実、学校開放の時間延長などである。

3. 要約

岩手県の農村的小都市である遠野市を対象として実施した、質問紙法による第1次の調査研究「遠野市民の運動・スポーツに関する意識調査」の結果について、現在運動やスポーツを行っている者で行っていない者との対比に焦点をあてたこの分析から、以下に要約する。

第一に、学校時代によくやったスポーツ種目と現在よくやるスポーツ種目との間にはある程度の相関がみられはするものの、全般的にみればその関係はかなり薄い。ここには、そのときどきの種目の流行

廃りからくる限界も当然あろうが、学校でかなりよく行われるスポーツ種目、砕いていえば人気のあるスポーツ種目については、市民への影響も考えて、施設設備を整えていくことは必要であろう。たとえば、種々の理由があろうが、女性では学校時代に一番よくやったスポーツとして卓球をあげた人が10~8%もいるが、現在一番よくやるスポーツとして卓球をあげる人は1%にすぎないことなどである。テニスも意外に少ない。

次に、東京都中野区の調査で、希望のスポーツ種目⁷⁾をみると、男性ではゴルフ24%・テニス19%、水泳19%・野球16%、女性では水泳31%・テニス24%・健康体操21%・ダンス18%の順が示されている。遠野調査であげられる、現在一番よくやるスポーツ種目は、これと比較して大きく異なっている。地域環境その他の違いから当然希望種目も異なるであろうが、標本抽出をきちんとした上で調査によってこれをおさえておくことは必要であろう。

さらに、体育施設についてみると、望まれる施設として、自然環境の豊かな公園・緑地が断然トップにあげられている。これは、遠野調査ばかりでなく他の調査においても同様な傾向を示し、東京都千代田区の調査ではこれに加えて、公園にほしい風景⁸⁾のイメージをたずねている。この調査によると、「さらさらと流れる小川のイメージ」が39%で第1位、「トンボの飛ぶ野原のイメージ」が19%で第2位であったと報告している。遠野市はまさにこのイメージにある田園都市であるといえよう。体育施設の充実というときの、その充実の視点を探ることが第一の課題であるといえよう。

加えて、現在スポーツをやっている人の、自由記述にみる、気軽に利用できること・利用料金(駐車場料金も含めて)が安いこと、利用時間を延長すること、等の体育施設に対する要望も施設充実の視点にシステムとして組み入れられなければなるまい。

注

- 1) 東京都東村山市教育委員会「健康とスポーツに関する市民意識調査」、昭和62年6月実施、青山昌二(東村山市スポーツ科学委員会委員)集計、未発表。
- 2) 東京都大田区教育委員会社会体育課「健康スポーツに関する区民意識調査」43頁、昭59。

- 3) 東京都大田区企画部広聴相談課「大田区政に関する世論調査・経年分析」112頁, 昭62。
- 4) 文部省体育局「昭和62年度体力・運動能力調査報告書」196頁, 昭63。
- 5) 東京都中央区企画部広報課「区政世論調査」60頁, 昭62。
- 6) 前掲「健康とスポーツに関する区民意識調査」71頁。
- 7) 東京都中野区企画部広聴課「中野区政世論調査'84」65～68頁, 昭59。
- 8) 東京都千代田区企画部広報課「第13回千代田区民世論調査」94頁, 昭61。